［特集］序文

特集の序に寄せて

新型コロナウイルス感染症流行状況における フィールドワーク教育

2020 年度の授業実践

愛知県立大学外国語学部国際関係学科教授
亀井伸孝

特集の背景と趣旨

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行に伴い、大学教育、とりわけフィールドワークを中心とした社会調査の実習は、多大な影響を被った。通常の講義についても、大幅な方法の変更という対応を迫られたが、フィールドワーク関連の教育については、その実施の可否を含めて再検討することを余儀なくされた。

感染症流行時における実習をめぐる困難さには、おもに以下のような各点がある。調査実施の可能性を予期しながら、感染状況を見据えて、常にプラン B の準備をすること。実施可能であると判断した場合は、綿密な調査計画を立案し、特に感染予防策を講じつつ、学生に対する指導を徹底すること。安全性をめぐり、調査協力者と丁寧な確認などを行うこと。事後の健康管理を重視すること。実施日の学生の体調や心理に配慮し、参加を希望しない場合の代替課題を用意すること。実施できない場合に備え、オンラインによる調査などの方法を調べること。そのような新しいツールによる調査方法の習熟のために機材を用意し、事前に試行し、教員自らが習熟した上で、指導を行うこと。発表方法においても、安全に配慮した工夫を行うこと。この他、大部分の授業がオンラインで行われている中、自宅を中心とした生活スタイルが確立してしまったことから、学生たちが特定の日時に集合しにくいという計画の立てにくさも重なった。

例年と同様のことがまったくできないという状況の中、好むと好まざるとに関わらず、選択肢の拡充を迫られた１年であった。このような苦難に満ちた年度であったとは言え、振り返ってみれば、工夫しながらある程度の実習の成果は上がったと見ることができる。また、やむをえず拡充した選択肢であったとしても、それらにメリットを見出せる側面もあり、感染症収束後も含め、新しい調査と発信のスタイルとして活用できるものも含まれている。

苦労した教育の経験を放置し、忘却に委ねるよりも、実践記録として残すことによって、1 年間の達成と課題を振り返る機会としたい。また、このように記録を残すことは、今後とも何度も訪れるかもしれないフィールドワークの危機に対する備えともなるであろう。このような意図に基づき、2020 年度のフィールドワーク教育の実践記録を特集する運びとなった。

本特集の構成

本特集は、4 件の教育実践報告と、1 件の行事報告から成り立っている。

東報告は、外国語学部国際関係学科の専門科目「プロジェクト型演習」の当初計画を全面的に変更し、来日インドネシア人介護福祉士候補者との愛知県内での交流活動から、台湾の大学とのオンライン交流活動へと切り替えた経験を詳述している。大幅な変更を経ても、「日本語学習者との直接の交流を通して、多文化化する日本社会の課題を身近なこととして捉える」という授業の目標は果たされたと評価し、オンライン会議システムの利便性を結論としている。

松宮ほか報告は、教育福祉学部社会福祉学科における社会調査関連の授業において、量的調査と質的調査の両方に挑戦した経験を詳述している。Google Forms や Zoom を用いることで調査方法のチャンネルを拡大し、多くの卒業論文研究が遂行できたことを成果として示しつつも、身体性や非言語的コミュニケーションなど、現地調査が有するさまざまな要素の欠如を課題として指摘している。

宮谷報告は、外国語学部の「プロジェクト型演習」や日本語教員課程の「日本語教育実習」など、フィールドワークや学外活動を盛んに行う科目において、方法の変更を余儀なくされた状況の中、一部にフィールドワークの要素を残しつつも、Teams、Zoom、LINE、Facebook、Google Forms、Padlet などのツールを組み合わせ、社会とつながる学びの場を創ってきた経験を紹介している。新しい手法に対する学生たちの反応を交え、達成や課題を具体的に示している。

亀井報告は、外国語学部国際関係学科における、対物観察、インタビュー、写真、映像などを用いた多彩なフィールドワーク実習および卒業論文関連調査・指導の状況について、当初計画と実際の実施状況を対比させながら紹介している。また、学内でフィールドワークの許可を得るため、さまざまな交渉や提言を行い、制度化に努めた経緯についても記録している。

最後に、これらの教育実践と深い関わりのある公開懇談会の記録を付した。フィールドワーク実習の困難さに直面した教員有志が、意見交換を目的として開催したこの行事が、その後の充実した教育実践を展開させていくための重要なきっかけとなった。

これらを資料として残すことにより、今後とも生じうる予測不能な事態に対する備えとなすとともに、各大学で苦心しながら実践に取り組んでいる同業者との意見交換の活性化に資するところがあればと願っている。